

地域社会を核とした教育と研究のつながり

特別支援教育講座 加藤哲則

1. シンポジウムの話題提供

今年度の FD シンポジウムでは、地域の発展を促すことができるような教育および研究を進めておられる先生方からの話題提供を基に議論が行われた。

今回の話題提供では、国語・美術（図画工作）・特別支援教育の話題提供がなされた。国語の話題提供では、研究対象が地域にある『坊ちゃん』であり、その研究を基に地域の発展に寄与することが指摘された。美術の話題提供では地域の小・中学校を研究フィールドとして地域の美術科・図画工作科に関わる教員の質の向上と学部教育の改善についての指摘であった。特別支援教育の話題提供では、地域のネットワーク構築と大学・医療・教育等の異業種間の連携と、大学・教育委員会・特別支援学校の連携に医療と教育の連携を加える形での研修事業など、地域での連携の枠組みを中心にした研究と教育の往還についての指摘があった。

いずれの話題提供にも共通するのは、研究フィールドが正に地域であり、研究者が大学から飛び出して行くことであった。さらにその研究成果を基に学部教育に還元したり、教育の場をも地域に持ち出すなどの取り組みが行われており、地域に密着した教育・研究の方向性を示していると考えられた。特に今年度の学部入学生からは教員養成に特化したカリキュラムが走り始めたことから、これまで以上に地域と密着した教員養成のあり方が問われていると言える。

その一方で課題も見え隠れしていた。例えば、地域に研究や教育に出るためには、自分の関連領域が地域のフィールドとして存在していることが必要になろう。さらにシンポジウムの3つの話題提供を総合して考えると、それぞれの専門分野での研究・教育が独立していることも課題だと思われた。学校現場にそれぞれの専門分野で地域に飛び出して行くことも重要であるが、例えば各教科・領域の融合や各専門分野間連携も必要であると考えられた。

2. シンポジウムをふまえた授業改善

今回のシンポジウムでは、それぞれの先生方が地域にある社会資源を基に研究が進められ、なおかつ研究成果を教育に活かすことが行われていた。

授業改善の観点からは、地域の現実的な課題を如何に学生に当事者意識をもつように伝えるのか、その課題を学生自らが探求し、課題解決する授業方法のあり方について、考えていく必要を感じた。今回の話題提供では、特別支援教育、特に広義での特別な教育的ニーズをもつ子どもへの学習保障について述べられていたが、そこに授業の一環としてとして参加する学生の意識や学修意欲はどのようなものであったのか。大学教員が大学の授業として医療の現場を提供して、実際にその中に入る学生の意識や学修意欲をもって臨んだのか否かが、重要な次のステップになると考える。学生が自ら学ぶのと大学教員から学ばされているのでは、学修効果も異なると思われる。そのためには、地域に目を向け、地域の課題を自分のものとして受け止められる学生を育てなければならないと考える。既に次期学習指導要領案が公表され、そのキーワードとして掲げられているアクティブ・ラーニングの実践者としての教員養成という喫緊の課題を解決するためには、大学での授業の提供方法を変えて行かなければならない。これまでの自身の授業改善においても徐々にではあるがアクティブ・ラーニングの要素を取り入れて来た。さらに今後は、地域の要素を加えて行くことで、より地域に根ざした研究と地域に根ざした教育とその往還が可能になると考える。

今後の授業改善の方向性として、学生自らが地域に目を向け、学生自らが地域の教育的な課題を当事者として受け止めるための工夫が必要である。担当科目では、新入生セミナー B で実施している地域の特別支援学校等の観察時の課題提示や観察後の省察において、学生が自ら学修する授業方法について検討していきたい。